



令和3年度

鹿児島県の教育

4・5月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
長 鶴丸高等学校長
前 田 光 久

就任にあたって

この度、月野前会長の後任として県連合校長協会に就任いたしました。微力ではございますが、本県教育のさらなる充実・発展に尽くす所存でございます。

連合校長協会は、小・中・高・特別支援すべての校種を統一する、全国にも例のない組織で、この四月には、新しく百五十八名の会員を迎え、小学校長部会長に六笠先生、中学校長部会長に岩越先生、特別支援学校長部会長に福田先生が就任されました。会員の皆様の御協力をよろしくお願いいたします。

さて、昨年度は、未知のウイルスによって学校の在り方そのものの見直しを迫られた一年でした。まさに、今後私たちが教育を通してその対応を迫られるとされてきた「予測不能な社会」「急激な社会変化」の到来でした。全国一斉の臨時休業の中、学校現場では、いかにして従来の学校教育を復活させるかに苦心を重ね、また、「ニューノーマル」への対応や感染症マニュアル遵守の求めに対し、学校行事等において、苦渋の決断をせざるをえない場面も多かったのではないのでしょうか。

こうした中、学びの保障という点から、ICTを利用した遠隔・オンライン教育の充実が求められると同時に、対面指導との組合せによる「ハイブリッド型」教育の必要性も唱

えられています。そこでは、ハード面の整備が進む中、教師の指導力向上が急務とされており、本年度は、各校種とも、いかにして教師のICT活用能力を高めるかに知恵を絞ることになると思います。

一方、こうした学校を取り巻く環境の変化は、学校教育そのものの意義を再確認することにも繋がりました。今年一月の中教審答申でも「子どもたちや各家庭の日常において学校がどれだけの大きな存在であったのかということが、改めて浮き彫りになった。(中略)学校は、学習機会と学力を保障するという役割のみならず、全人的な発達・成長を保障する役割や、人と安全・安心につながる事ができる居場所・セーフティネットとして身体的、精神的な健康を保障するという福祉的な役割をも担っていることが再認識された。」と述べられています。

学校を預かる私たちには、こうした学校の役割の重要性を学校全体で共有しつつ、子どもの発達段階に応じて、校種を超えた情報交換や連携・協力が求められています。

会員の皆様には、山積する様々な教育課題の解決に向け、まずは自己研鑽に努めながら、四校種がお互いに知恵を出し合い、積極的な取組がなされますようお願い申し上げます。

* おもな内容 *

巻頭言	1	ある日の校長講話	12
提言	2	読書案内	14
退任にあたって	4	一般(助)県校長会館だより	16
新任の抱負	9	編集後記	16

令和3(2021)年 4・5月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



校長として心掛けていること

坂元小(市) 田畑 一 巳

四月になり、新一年生が真新しい制服に身を包み、少し大きなランドセルを背負い、にこにこしながら登校する姿を見ると、「よし、この一年また頑張ろう!」という気持ちが自然と湧いてくる。

しかし、今日の学校は、学力向上、いじめや不登校、GIGAスクール構想に基づくICTの活用、コロナ感染症予防対策など課題が山積している。これらの課題に立ち向かっていくためには、学校が組織として対応することが必要であり、そのためには、校長のリーダーシップが不可欠であるとよく言われている。

リーダーシップとは、組織が目的を達成するために必要なものであり、一人ではできない目的を達成するために他者に働きかけ、協力を仰ぎながら、その実現を目指す力である。

ある研修会の中で、校長として必要とされるリーダーシップには、「傾聴態度が大切である」と学んだことがある。教職員との意思疎通を密にし、教職員一人一人の問題意識やアイデアを引き出し、顕在化させ、それを学校経営に生かすようにする。そのことにより、教職員のエネルギーが高まるとともに、組織の活性化につながっていくことが期待される。この関係性を基に、

教職員に主体性が生まれ、学校経営に参画する意識が強固なものになると。

さらに、校長は、一人一人を育て、組織としての力を高めるために、責任は取りつつも思い切った仕事を任せ、教職員に自分が信頼されているという実感を持たせることが大切である。

期待のかけ方一つで、人が動くかどうかが決まり、それに応えようとして人は成長すると学んだ。

様々な課題に対して、校長として「こんなふうに変えたい。」「新たにこうしたい。」という時は、まず教頭や三主任に話して、意見を聴くようにしている。そうすることによって、実際の教職員の事情や異なる角度からのアイデアなどが出てきて、よりよい方向性を見いだすことができることが多いと感じている。そして、ある程度の方向性が定まると、係や担当者に話して、職員全体へと下ろすように心掛けています。

また、「校長先生これはどうしたらいいですか。」と直接解決方法を聴きに来る教職員もいる。そんな時は、係としてどうしたいのか、他の係員とも相談してからその案を持ってくるように指示する。その案に納得したら、「いいね。

よしやってみよう。」と任せるようにしている。組織としてやってみて、結果がよければ大いに褒め、そうでなければ次をどうするかを考えさせる。そうすることによって、教職員のやる気や参画意識、組織としての活性化が進んできたように感じている。

もう一つ、校長として大切にしていることがある。それは、仕事と余暇のバランスである。

若い時、ある先輩から、仕事上手は、遊び上手と教わった。「仕事をする時は、一生懸命仕事をしなさい。ただし、仕事はしっかりしてはだめだ。仕事を忘れて、遊ぶ時にはとことん遊びなさい。」と。

要するに、仕事と仕事を忘れて何かに没頭することのバランスが大事であることを教わった。学校の長として、多くの課題があり、様々な場面で判断したり、対応したりしなければならぬが、ずっとそればかり考えていては、やはり精神的にも参ってしまうことがある。数年前は、仕事帰りに飲みに行き、カラオケで歌ってストレスを発散していたが、コロナ禍ではそれもできなくなつた。そんな中でも、バイクでツーリングに行ったり、少し長い距離を散歩したりしながら、仕事を忘れて、没頭する時間を大切にしている。何をやるにしても、やはり心身共に健康であることが基本であり、一番である。

「提言」とまでは言えないが、自分なりに心掛けていくことについてまとめてみた。少しですが参考になれば幸いです。



新しい学校は校長が創る

清水中(市) 竹之下 浩 徳

「次世代の学校創りは、校長がそれを意識したときから始まる。時代の先を読み、新しい発想で考え、行動していく校長でありたい。」これは、東京都江東区立明治小学校統括校長の喜名朝博先生の言葉である。毎年のように学校改革が叫ばれてきたが、今年はいよいよ待ったなしの状況だと感じる。

昨年度は、コロナの影響により、図らずも、学校がこれまで当たり前に行ってきた教育活動の意味を問い直すことになった。

各学校の実情に応じて実施した体育大会や文化祭、行先を県外から県内に変えて実施した修学旅行等、感染対策との両立を図りながら、職員も生徒も一緒に知恵を出し合い、工夫を重ねた一年であった。そのような中、特に心に残ったのは、授業時数の確保や密を避けるために、例年より少ない練習時間等で臨んだにもかかわらず、各種行事が例年どおりに立派にできたことである。これまで、学校行事の練習や準備に費やしてきた膨大なエネルギーについて考えさせられた。

また、集会活動や一斉指導を、リモートで行ったことにより、生徒の移動時間が削減され、活動そのものの時間がこれまで以上に確保できる

ようになったことなど、コロナ禍であったが故の様々な気付きがあった。そのため、今こそ、学校改革にとっては、うってつけの好機であると実感した年でもあった。

そこで、今年特に意識して臨みたいことについて述べてみる。

一 GIGAスクール元年

GIGAスクール構想によって、二〇二三年度までに整備される予定であった「一人一台端末」が、コロナ禍における子どもたちの学びを保障するために前倒しで行われることとなり、県内でも多くの学校でその環境が整いつつある。

「多様な子どもたちを誰一人取り残すことのない、個別最適化された学びの実現(中教審初中分科会より)」。この大前提となる「一人一台端末」の実現は、まさに次世代の学校の到来を告げるものであり、今年はその元年として大変重要な年であると認識している。

一人一台の端末は、「読む」「書く」「見る」など、個々の学びの特性に対応する必要不可欠なツールとして活用されたときにはじめて、キーワードの「個別最適化」が図られる。

普段教職員が使う校務用コンピューターに置

き換えるとわかりやすい。教職員にとつて、一人一台の端末は、様々な校務処理や授業の準備、調べ物など、なくてはならないツールとなっている。

これと同じように、生徒も「一人一台端末」を、まるで文房具のように使い、学校には、端末一つ持って登校する時代がやってくるのである。

二 働き方改革のさらなる推進

令和元年九月、県教育委員会は、教育の質の維持・向上を目指す「学校における業務改善アクションプラン」の重点取組について、次の四つを挙げている。

- ① 業務改善に対する意識改革
- ② 事務の負担軽減と専門スタッフの活用
- ③ 授業準備の効率化と時間確保
- ④ 部活動に係る勤務状況の改善

これらを確かな改善としてより実感できるようにするため、各項目の「見える化」をより一層推進し、学校内で共有していきたい。こちらも待ったなしの状況である。

学校の新しい時代は黙して座すばかりではやってこない。冒頭にも引用したとおり「次世代の学校創りは、校長がそれを意識したときから始まる。」のである。今回は、ICTの活用と働き方改革の推進について述べたが、この二つは密接に関連することは言うまでもなく、この他にも、多くの学校改革の柱があると承知している。

校長として勤務する期間は、教職人生の中でわずか数年であり、その短くて貴重な期間に新しい学校の礎づくりに携われることに感謝したいと思う。

退任にあたって



一般財団法人鹿児島県校長会館前理事長
前県連合校長協会会長
前鶴丸高等学校長
月野 功

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大という危機的な事態に直面し、感染状況がどうなるのかという予測が極めて困難な中、社会の様々な活動の在り方をどうすべきか、私たちはどう行動すべきか、確信をもった答を誰も見いだせない状況が続いています。

先生方の学校でも、昨年度は殆どの教育活動を例年どおりに行うことができず、試行錯誤の繰り返しであったと思います。

年度当初はこの感染症への有効な対処の仕方が分からず、中止や活動の制限といった対応しできませんでした。年度後半からは感染対策を講じながら、最大限、児童生徒の学びを保障できるように、各学校また部活動の団体等で取り組んでこられました。また、厳しい状況の中での試行錯誤や各活動の教育的価値を問い直すような検討を重ねた結果、経路依存性から脱却し、新たに価値あるものを見いだされた学校も多かったのではないかと拝察いたします。

今年一月に公表された中教審答申では、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を謳い、その中でこれからの学校教育を支える基盤的なツール

としてICTは必要不可欠なものであると指摘しています。

国はGIGAスクール構想の実現のため、生徒一人一台の端末環境の整備を急ピッチで進めており、昨年度、各学校に対して多くの台数のタブレット端末が配備されました。

答申では、こうした環境の下で、①生徒がICTを文房具として自由な発想で活用できるような授業をデザインすることやICTを活用することで生徒自ら学習を調整しながら学んでいることができるよう個に応じた指導を充実させること。②オンラインを活用して空間的・時間的制約を克服し、学校間や大学・研究機関、海外との交流を進め、生徒の個々の才能を存分に伸ばせる学びの機会を拡充すること。③感染症や自然災害等により生徒が登校できない場合や学校で学びたくても学べない生徒（病気療養、不登校など）に対し、同時双方向型のオンライン授業を授業の一部として特例的に認め出席扱いとした上で、学習の成果を評価に反映させることなど、我々がさらに研究を進めていかなければならない事項を示しています。

この場合、ICTを活用すること自体が目的

化してしまわないよう留意すること、授業や実習・実験、体験活動等を通して同じ空間で時間を共にすることでお互いの感性や考え方に触れ刺激し合う重要性について改めて認識する必要があります。我が国の学校教育におけるICTの活用は国際的に大きく遅れをとってきたが、これまでの対面指導で実践されてきた成果とICTとを最適に組み合わせる（ハイブリッド化を図る）ことで、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことができるのではないだろうか。

二〇二〇年代を迎えて、人工知能、ビッグデータ、IoT、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられるSociety 5.0社会への移行が加速化し、社会の在り方そのものがこれまでとは非連続と言えるほど劇的に変わりつつあります。さらに新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、例えばテレワーク・遠隔診療のように、社会全体のデジタル化やオンライン化を大きく促進しています。ビッグデータの活用等を含め、社会全体のデジタルトランスフォーメーションが加速されていることを踏まえた学校経営の必要性が、今後ますます高まっていくと思われれます。

これから未体験ゾーンに踏み込む先生方は、校長協会という相互扶助の精神で成り立つ組織の力を最大限に生かして、果敢に攻めていただきたいと思えます。健闘をお祈りいたします。



「桃李もの言わず」というが

一般財団法人鹿児島県校長会館前副理事長
前県連合校長協会中学校長部会長

前鹿児島市長立長田中学校長
大久保 哲 志

「チームとしての学校が求められる背景や基本的な考え方、具体的な改善方策については、概ね賛成である。しかし、専門スタッフなどを入れることによって、教職員定数が削減されることがないようにしていただきたい。教職員の定数の拡充は不可欠である。」

平成二十七年八月二七日、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の第三回関係団体ヒアリングの席上、全日本中学校長会の代表が、毅然と発言したのである。

平成二十六年七月、中央教育審議会は、文部科学大臣から「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」の諮問を受けた。このうち、「チームとしての学校」に関わる事項に関して、専門的な議論を深めるため、同年九月、「チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会」（以下「作業部会」という。）が初等中等教育分科会に設置され、作業部会は、平成二十七年七月まで十四回に及んだ。そして、七月十六日の初等中等教育分科会で、「中間まとめ」を公表した。

私は、この作業部会の委員として、当初から参加していた。学校における課題が複雑化・多様化し、教員だけでは解決できないので、心理

や福祉等の専門スタッフを置いて学校の機能を強化するという考え方は納得できたが、その一方で、ある疑念が晴れずにいた。

文部科学省は、平成二十四年以降、毎年新たな教職員定数改善計画案を策定し、概算要求を行ってきたが、予算編成において認められることはなかった。そのため、文部科学省は、教職員の拡充を諦め、教職員の代わりに専門性を有するスタッフを学校に置く方針に舵を切ったのではないかとこの疑念を持ったのである。現に、作業部会の議論は、専ら、導入する専門スタッフの活用方法などが中心であった。

「中間まとめ」の公表を受け、関係団体からのヒアリングにおいて、冒頭の発言があったのだ。これを機に、作業部会の委員の間にも、専門スタッフの配置以前に、教職員定数の充実が前提であるとの認識が、広がったように思う。なぜ、それほど反響があったのか。それは、ヒアリングの中で、たった一人の校長が発言したものであったが、全国の学校現場を預かる全ての校長の声であったからに他ならない。つまり、全国の全ての校長が所属、支持している校長会の代表の声であるという重みによって、担保されているのだ。

近年、組織としてまとまることの大切さを取り上げる人が増えたにもかかわらず、組織に属しながら人も見られるようになってきた。本県の校長会の中にも、「校長会は入らなくてはならないのか。」という発言もあると聞いている。

私は、これまで組織で当たらねば解決できないことがあることを痛感してきた。また、個人としての発言は取るに足らないと、一蹴される場面が多いことも体験してきた。だからこそ、全員が一つの組織としてまとまることの強みを知っているつもりだ。いざというときに守るべきものを守る大きな力であるために、全員で組織することは必須だと思っている。同時に、会の代表として発言する立場の人は、一人一人の声を丁寧に汲み上げ、真摯にとらえ、大きな力へと育てるシステムを構築しなければ、その組織は魅力を失うということも。

人は魅力的なものに集まってくるものだ。県下の校長で組織している校長会は、会員一人一人にとって魅力ある組織たり得ているか。そのことを振り返るとともに、組織の機能と成果を明確に示し、校長会の魅力として広く知らしめることが大切ではないか。

他県では類を見ない、全ての校種の校長で組織した鹿児島県連合校長協会には、守るべき伝統がある。それを、漫然と引き継ぐだけではなく、新たな時代に対応した、斬新で機能的な組織としての魅力も発信してほしいと願っている。



三月三十一日を突き抜ける

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会中学校長部会副部長

前川内北中学校長
桑畑明斎

退任にあたって

「三月三十一日を突き抜きゃんせよ。」と、退職を目前とした時期に、数名の先輩校長先生から言葉かけを頂いた。教員生活に有終の美を飾るべく、何事もなくその日を迎え悠然と突き抜けることへの激励の言葉と受け取り、「ありがとうございます、ございます。」と返事した。また、「三月三十一日は、最後に鍵締めをされますか。」と、教頭先生から問われた。しかし、その日は、ここまで支えてくれた妻への感謝の日にするつもりでいたので、「夜は店を予約して、夫婦で食事に行つて、鍵締めは任すつて」と言い、その儀式は断つた。

そして、迎えた三月三十一日、十六時四十五分、職員に見送られて校門を出た私は、帰宅してそそくさと支度をする、夫婦で食事に出かけた。

食事を終えて帰宅したのが十時、四月一日は、九時から次の職場での辞令交付式があるので、寝がけにもう一杯飲んで床に就こうとすると、

あの先輩校長の声やけに耳についてきた。「三月三十一日を突き抜きゃんせよ」と…。

年度末の人事異動や校内人事、来年度の教育課程の詰めや挨拶回りに追われ、最後の最後までですったもんだしていた自分の無計画さにあきれながらも、「三月三十一日は、ただの人生の通過点、見事に突き抜けて、翌日からの第二の人生にすんなりと突入してみせる」と、口笛を吹いていた。

ところがである。床に就いたもののなぜか眠れず、あれやこれやと考えている内に、これまでの校長としての覚悟だとか自覚だとかを顧みる時間が悶々と続いた。ただ、元来底抜けに前向きな性格の私は、翌朝何事もなかったかのよう、新しい場所で、平然と辞令を頂いた。

そして、今こうしてあの瞬間を思い起こしてみると、あのとときの先輩方の助言の真意は、「無事に退職の日を迎えられたらいいね。」などというウイニングロードへの賞賛と激励ではな

く、最後の日まで、校長職として責任ある職務遂行を促すための、「三月三十一日は、誰でも突き抜けることはできる。ただ、後悔のないように突き抜けたら、後ろを振り返るなよ。」であつたように感じている。そして、あの言葉を今のように受け取っていたら、「ありがたうございます。これまで、自覚も覚悟も足りなかつた自分ですが、最後の詰めだけは、きちつとやり遂げます。」と、応えられたのではないかと思う。また、教頭先生の問いに、「十六時四十五分には、施錠が完了できるように、来年度準備に力を合わせましょう。」と、応えられたのではないかと思う。そんな後悔ばかりの校長職としてのラストスパートではあつたが、今はただ、新しい校長先生の元、子どもたち一人一人・職員全員の笑顔のために、学校が発展してくれることを願うばかりである。

四月から、発達支援センターつくし園というところの園長職を拝命して働いている。未就学・未就園児の発達支援に携わるこの施設の職員と園児の笑顔のため、園長としての覚悟と自覚をもって、そして、「三月三十一日を突き抜ける」ことができるように、汗をかこうと思う。



これからの時代を生き抜かなければ ならない子どもたちのために

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会高等学校長部会副部長
西橋 瑞穂
前甲南高等学校校長

令和二年二月二十七日の緊急事態宣言により、学校は一変した。前年十二月頃から「コロナ」の声は聞いていたものの、それは遠い所の出来事で、普通に令和二年度を迎えるのだと思っていた。卒業生のみ参加の寂しい卒業式や臨時休業を経験しても、これは一時的なこと、間もなく元に戻るのだと思っていた。しかし、違った。何もかもが例年どおりにはいかなくなり、課題山積の毎日であった。

着任した三年前の入学式をはじめ、様々な場面で、生徒に職員に保護者に、「予測不可能な社会を生き抜く」ためには、「自ら課題を発見し、解決する力」などが必要だと話をしてきた。しかし、そう言いながらも、まさか、その「予測不可能なこと」が、まさに予測していなかった形で目前に迫っていたとは思ってもいなかった。「新型コロナ」は、我々に様々なことを考えさせるとともに、日常を奪うものがすぐそこに潜んでいるのかもしれないことを改めて認識させた。

温暖化による脅威もその一つだ。五十年？に一度の大雨や三十五度を超える気温が珍しくな

くなっている。「猛暑日」も「危険な暑さ」も聞き慣れた。気温の上昇は明らかで、このまま何もしなければ、温暖化は加速の一途を辿り、取り返しのつかないことになる。二〇三〇年は未来への分岐点であり、これからの十年が極めて重要だと言われている。このことをどれくらいの人々が聞いたことがあって、自分事と捉えているだろうか。

飛行機から日本の国土を見ると、緑の山がたくさんあって、人間が住んでいる部分はわずかなように見える。大きな地球上の小さな世界に暮らしているのだから、人間の活動によって起こる大気汚染や海への負荷を、地球は受け止めてくれると思っていた。ところが、最近の雨の降り方一つをとっても、やはり、地球に何かが起こっていると思わざるを得ない。科学的な知識がなくても、動物的勘で感じるはずだ。感じないとおかしい。

実際、最新の科学はすでに地球が飽和状態に達していることを示している。自動車の保有台数や化石燃料等で作られた電気の消費量が膨れ上がる一方で、肉の消費量が増え、家畜を育

てるために森林を開発したことによって、二酸化炭素を吸収する力が減少している。つまり、人類の活動の影響をやわらげ、吸収し、熱を冷ますことのできる地球の力が失われる結果に結びついているのである。

産業革命以降、先人の努力と工夫により、膨大な恩恵を受けてきた。しかしながら、一方で、地球を痛めつけてきたのも事実だ。

これからの時代を生きる子どもたちは、地球が持続可能であるための努力と工夫の先頭に立たなければならぬ。そのためには、現在の地球の状況を認識することが重要である。人間は、地球上で唯一、過去に学び、未来を想像・創造できる動物である（と思う）。子どもたちには、夢を抱かせたいし、我々も夢のある話をしたい。しかしながら、「地球の安定」が「夢」の前提条件である。その前提条件を満たすためには、まず、状況を知ることである。そして、行動することである。「好きなこと、楽しいこと」ばかりに捉われず、それができるための「地球の安定」を守ろうとする姿勢を育てなければならぬ。

悪い行いをする者が
世界を滅ぼすのではない
それを見ているながら
何もしない者たちが滅ぼすのだ

(アインシュタイン)
これからの時代を生きる子どもたちのそばにいる者ができることはたくさんあると思う。

「幻の川」へ繋がりゆくものへ



一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会高等学校長部会副部長
前鹿児島立鹿島中高等学校長
小屋敷 浩 昭

「君は幻の川を見たことがありますか。」

教師として若い時分に、年配の先生から拝聴した言葉だったことは間違いない。しかし、どんな状況で誰から聞いた話だったのか、今となっては曖昧である。現在でも時折、光を当てて大切にしている。確か、霜が辺り一面真っ白に降りた極寒の早朝、先生が勤務していた学校の校庭に一筋の道が浮き上がって見えたとという類の話であった。水捌け用の側溝が埋まっていたことで発生した現象であつたらしい。その神秘的な光景は、まるで学校を貫く独自の精神や伝統が脈々と継承されている象徴のように感じたと話だつたと記憶している。現在では地球温暖化のため、霜柱を踏む機会にはお目に掛かりにくいのが、今でも「幻の川」は同窓生たちの心にゆつたりと流れているに違いない。

今年の春は例年になく暖かい日が続いた。定年退職という区切りが迫っていることは理解していたものの、日常の慌ただしさや新型コロナウイルス対応に追われて現実味に乏しかった。年度が押し詰まってくると、学校の正門付近では桜の花びらが舞い始め、その下ではツツジが早くも彩りを添えていた。桜もツツジも次の世

代に繋ぐ準備を整えてきたはずである。毎年繰り返される自然の摂理である。「長年にわたりお疲れさまでした。」「これまでのご尽力に感謝します。」「第二の人生をゆつくりとお過ごしください。」などと、周囲から温かい言葉をいただいたり花などが届いたりするに従い、次の方へ繋ぐ時ですよと心を整えさせる効果があることに気付かされた。また、音信の途絶えていた初任校の生徒たちが、定年を聞きつけて訪問し、今ではさほど年齢の差を感じないことに驚いたりもした。「定期人事異動」と「定年退職」とは意味合いも性質も異なるものであることを実感させられた。

ところで、教職員生活を振り返ると、生徒、保護者をはじめ、多くの方々との出会いがあつた。中でも、初任校で大きな影響を受けたN校長は自分にとって特別な存在である。先生は高邁な教育理念とともに慈愛に満ち、生徒からの人気は絶大を誇った。同じ教科の先輩であつたことから密かに目標としていた。年度末のある日、先生から私の担当しているクラスで授業をさせてほしいとの依頼があつた。急なことではあつたが、先生の授業を参観できるのは幸運な

ことと思ひ快諾した。学識をもとに生徒の知的好奇心を揺さぶり、テンポと迫力ある授業に圧倒されたことを強く覚えていた。その後、先生は定年まで一年を残して退職なさつた。詳しい事情は知るよしもない。教師としての心構えを繋いでいただいたと勝手に思い込み、教員生活の支えとしてきた。年齢だけは当時の先生に肩を並べて追い越してしまつたが、側まで近づいてはいない自分を認識している。

昨年の二月以降、学校では新型コロナウイルスへの対応に頭を悩ますことが続いている。前例がないので、授業や部活動、体育大会や国内体験学習などの実施に大きな影響が生じた。実施の是非を議論するところから始めなければならず、物理的にも精神的にも職員の仕事は大変なものであつた。他にも、英語民間試験導入の動きや大学入学共通テストの実施、新学習指導要領の移行期間など、大きな変容の時期でもあつた。ただ、令和二年度に取り組んできたことが基本となり、新たな展開に進むためには貴重な一年であつたと、やがて懐かしく思い出す時が訪れることを願っている。

一般的に、物事が成就するためには内部から生じた兆しが連続していくことが重要となる。果たして、私たちはどのような精神を繋げたのだろうか。内から湧き上がる多数の兆しが、やがて本県教育を貫く一筋の川となり、滔々と流れてゆくことを切に期待している。最後に、連合校長協会の益々の御発展はもとより、会員の皆様の御活躍と御奮闘を祈念申し上げます。

新任の抱負



「気付き、考え、実行する」学校を目指して

鹿屋中(隅) 森 拓 郎

はじめに

四月二日。鹿屋中学校で校長として初めての職員会議を終えて、まだ他人の家の居間のように感じる校長室で一息ついていたら、米寿あたりであろうか、杖をついた高齢の御夫婦が訪ねて来られた。名前を伺うよりも先にソファを勧めようとする、「拓郎くん、本当に拓郎くんだね。」とくしゃくしゃの笑顔で手を握られた。名前を聞き、思わずその手を強く握り返した。四十年以上前、鹿屋中区である祇川小学校に通っていた頃、いつも一緒に登下校していた友達の御両親だったのだ。卒業後、鹿児島市に転居した私にとって、鹿屋中学校は「入学したくてできなかった中学校」であった。今回、思わぬ形で鹿屋中学校への入学？が認められた私を、このように歓迎してくれる方がいることに感無量の思いであった。

二 鹿屋中学校について

本校は本年度七十五周年を迎える伝統校である。平成三十年から県総合教育センター研究提携校として新たな役割を担い、オープンスクールの実施を通して主体的・対話的で深い学びの視点に基づく授業改善の在り方などを公開している。校訓(自主・自律・協調)及び学校教育目標(気付き、考え、実行する)の具現化を目指し、「学力・体力・人間力大

三 気付き、考え、実行する

隅一」を学校スローガンに掲げて教職員と生徒会が一丸となって努力を重ねている。異学年で一緒に取り組む縦割り黙々清掃の実践や、学力向上検討委員会に生徒会も参加して、学び合いを取り入れた授業づくりを教職員と生徒がともに目指していくなど、よりよい校風を教師と生徒が共につくり上げようとしている姿が気持ちのよい学校だ。

三 気付き、考え、実行する

中でも驚いたのは、ほとんどの生徒が教育目標「気付き、考え、実行する」を誦んでいることだ。生徒会役員の話や、先生方の指導の中で、四月以降この言葉を何度耳にし、私自身も使ったことだろう。先日も生徒たち「この目標を語りかけながら、ふと、「この言葉は、今の私自身に対する最高のプレゼントだ」と気付いた。初めての校長職。これまでの経験では窺い知ることのなかった世界に飛び込むことが許された自分にとって、一つでも多くのことに「気付き」、校長として何をなすべきかを「考え」、生徒や先生方、地域の方とともに「実行する」ことこそが、これからの私の鹿屋中学校での使命であろう。そのことを胸に刻み、以下の重点課題に取り組んでいきたい。

- ① 学力向上
- ② 人間力の向上

③ 体力の向上

④ 地域・郷土に開かれた学校

①②③の向上に向けては、PDCAサイクルを実施して学力向上を目指しながら、生徒会や部活動とも連携して向上を図る。また、小中一貫教育の推進を図り、九年間を通して目指すべき子供の姿を小学校と共有しながら実践を重ねたい。また、④においては、共同経営者として、ともに熟議できる場を設けるなど、コミュニティ・スクールの一層の充実を図りたい。

四 おわりに

「チーム鹿屋中」と口にするとき、頭の中に教職員だけではなく、生徒、保護者、区内の小学校、県総合教育センター、コミュニティ・スクールを中心とした地域までも自然にイメージできるような自分になりたい。今の自分にとっては遠い目標だが、小さい気付きを大切に頑張っていきたい。

四 おわりに

校長室に掲げられた歴代校長の写真に、心の中で唱えながら一礼して一日を始める。「今日も一日、生徒や教職員が安心安全に過ごせますように。みんなにとって学びの多い一日でありますように。」
祈らずにはいられない。そして、頑張らずにはいられない。このような素晴らしい縁をいただいたのだから。
最後に、せっかくだいだいた原稿依頼なのだから、ここでコマースィナルをすれたいこととに、ふと「気付いた」。
鹿屋中学校は二月十日(木)オープンスクールを実施予定です。皆様のお越しをお待ちしております。

新任の抱負



ユイの心ぞしておぼらだれん

岡前小(大) 田子山 ゆかり

はじめに

「ようこそ岡前小へ」

笑顔と温かい言葉に迎えられ、新天地での
第一歩を踏み出した。

高台に位置し、美しい海が一望できる校庭、
広くて綺麗な校舎、豊かな環境が整った素敵
な学校。

まっすぐな瞳で、元気いっぱい語先後礼で
のあいさつをしてくれる子供たち。

礼儀正しく、熱意をもって教育活動に専念
している職員。

わずか数日でその素晴らしさに魅了され
た。

町の至る所には、「ユイの心」「おぼらだれ
ん」の言葉。その言葉の意味から、助け合い
の精神を大切にしていることや、何に對して
も感謝の気持ちをもつことなどを重んじてい
ることに胸を打たれた。

二 校章・校訓の由来

本校の校章は、桜の花びらの中央に岡前小を
配し、それを三つのペン先が取り巻く構成に
なっている。

桜の花びらは優雅で優しさを表し、三方の
ペンは知・徳・体を示し調和の取れた児童の
姿を象徴している。また、校訓には、「かし
こく」「やさしく」「たくましく」の三つの子
供像が掲げられ、知・徳・体のバランスのと
れた児童の育成を願うものとなっている。こ
れらには、品格と誇りをもち、何事も頑張り
抜くようにという願いも込められているよう
に感じる。

三 キャッチフレーズ

「ユイの心をもち、夢いっぱい、やる気いっ
ぱい岡前の子」

昨年度から引き継がれている本校のキャッチ
フレーズである。学校教育目標を児童に馴染
みやすい言葉で表現している。

互いを大切にする心、協力し合いながら困
難を乗り越えていく根気強さ、予測困難な時
代を自ら考え、判断しながら、未来を切り拓
いていくたくましさなどを育んでいくことが
込められているように思う。様々な機会を通
してこのキャッチフレーズに触れ、子供一人
一人が自分の目標の達成に向けて、たゆみな

四 毎日が感動

く頑張り続けていくことを期待したい。

始業式当日。「校長先生、これからよろしく
お願いします。」校長室に挨拶に来てくれた
下学年の子供たち。

率先してボランティア活動に取り組んでいる
上学年の子供たち。

島口の継承。島口を上手に使用して地域へ発信
する音読放送。

島唄と三味線の演奏。ぬくもりに満ちたP T
A 歓迎セレモニー。

O J T の気風が醸成され、明るく笑い声の絶
えない職員室。

毎日が感動！この感動がこの先もずっと続
くように、校長として精一杯頑張つていきた
い。強くそう思う。

五 おわりに

本校の校歌に「たがいに肩を組みながら楽
しく学ぼう」「まことの身を求めつつみんな
で励もう」という一節がある。「ユイの心」
そして「おぼらだれん」に繋がるものでもあ
るように感じる。

子供たちの幸せと健やかな成長のために、
保護者や地域との連携を大切に、全職員が
持ち味を生かしながら、一丸となって教育活
動に邁進できるような学校づくりを目指して
いきたい。

新任の抱負



地方創生の核となる

福山高校の在り方を考える

福山高 鶴 田 紋太郎

はじめに

令和三年四月一日、鹿児島県民交流センターにおいて鹿児島県立福山高等学校長として辞令の交付を受けた。校長という職責の重さからこれまで感じたことのない緊張感と高揚感に包まれた。新任地である福山高校については、高校教育課に勤務した三年間で、たびたび学校訪問に伺ったり、「霧島市・県立福山高校支援活性化対策協議会」にオプザーバーという立場で参加させていただいたりしていたことから、学校の現況や課題は把握しており、私自身今回赴任するに当たっては、大きな使命が課せられていると感じた。

二 学校の概要

福山高校は昭和六十年に鹿児島県立牧之原高等学校として開校し、二年後の昭和六十二年に鹿児島県立福山高等学校と校名を変更して現在に至っている。本校は開校当初普通科・農業土木科・商業科の三学科でスタートしたが、平成二十三年三月農業土木科は閉科となり、現在は各学年普通科一クラスと商業科一クラスの二学科二クラスからなる学校である。本校の校訓の一つである「貢献」を具現化したボランティア活動としての「フクヤマ」花文字清掃、さらに「福祉の町」福山町にある高校として、町内の福祉施設での体験学習

を行うなど、これまで地域との繋がりが強いということが本校の伝統となっていた。また、「霧島市・県立福山高校支援活性化対策協議会」が毎年開催され、霧島市長、霧島市教育長をはじめ福山町の各地区自治公民館長や近隣の小・中学校の校長・PTA会長、あいら農協福山支店長など地域の方々から委員として参加していただき、福山高校の活性化のために様々な御意見をいただいている。

三 地方創生の核としての高等学校

人口減少の加速化や高齢化の進行により、特に地方においては地域社会の担い手の減少とともに、消費市場の縮小による地方経済の縮小など、様々な社会的・経済的な課題が生じており、ここ福山町でも、地域社会そのものの持続可能性が危惧されている状況にある。

そのような中、令和三年一月二十六日に中央教育審議会から「令和の日本型学校教育」の構築を目指して「全ての生徒たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」(答申)が出され、その中で新時代に対応した高等学校教育等の在り方について次のように記されている。「各学校の実情等に基づき、特色・魅力ある教育活動を展開するための方策として、地域社会や高等教育

機関、企業等の関係機関と連携・協働することが求められる。もとより、子供たちの資質・能力は学校だけで育まれるものではないことから、一つの学校で全てを完結させるという「自前主義」から脱却し、学校内外の教育資源を最大限活用して、関係機関にも開かれた教育活動が行われる必要がある。」

福山高校のような中山間地域に立地する高等学校は、自宅から通学可能な唯一の高等学校として多様な生徒のニーズに応えるための役割が求められており、また、地方創生の核としての機能も有するという意識を持ちつつ地域社会の関係機関と丁寧な意見交換を通じて、教育水準の維持・向上に取り組みることが必要とされている。

四 福山創業塾

本校では地方創生につながる取組として、今年度から総合的な探究の時間を活用して「福山創業塾」という探究型学習に取り組み。具体的には、農業をベースとし、作物栽培、食品加工、販売活動を通して、創業の面白さを味わい地域を愛する心情を高める活動である。その際、佳例川地区自治公民館(「お田植え祭り」などの伝統行事を復活させ、「蔓無源氏」(さつまいも)などの特産品開発で地域づくりが評価され、総務省主催の平成二十九年年度ふるさとづくり大賞(団体表彰)受賞)と連携し、佳例川地域の活性化に取り組み、その結果、交流人口が増加するなど地域振興の一助となればと考えている。

地方創生の核となる福山高校の取組は始まったばかりであるが、地域の方々や中学生にとって魅力があり必要とされる学校を目指し全力で取り組んでいきたい。

ある日の校長講話



くたびれたカバン

中津川小(北) 徳 石 秀 二

このカバン。私の仕事道具を運ぶために使う、皆さんのランドセル代わりの物です。長い期間使っていて、結構くたびれてしまっています。三人の幼い子どもを育てながら、仕事をして生活する三十一歳の娘が、九年前にプレゼントしてくれた物です。大学卒業後仕事に就いて、初めての給料で買い求めたそうです。娘の初めての給料は、決して多くはなかったはずなのに、自分の必要な物は求めず、給料のほとんどを両親への贈り物に充ててくれました。私はその思いをとんでもありません。このカバンを今も大切に使い続けているのです。娘は、両親に大切に育ててもらった。学生時代の生活と学費

の負担もかけてしまった。自分が一人立ちして働いたお金で、せめてものお礼の品を贈りたいと思ってくれたのだそうです。

私の家では、自分の嬉しい出来事や記念日に、周りの人に感謝することが決まり事です。このことは、明治生まれの私の祖父母と、私の父母の教えによって身についたことです。祖父母は、二十九人の孫全員の誕生日に、命の続く限り毎回祝電を贈り続けてくれました。祝電には「秀ちゃん、お父さん・お母さんに感謝して元気で頑張ってくださいね。」と。父母も、私の毎年の誕生日を盛大に祝ってくれました。今は亡き父は「秀命に育ててくれたお母さんにお礼を伝える日だ。」と唱え続けていました。自分の嬉しい出来事には、自分を幸せにしてくれた人へ感謝する機会だと、長年の習慣から私の心にも染みつきました。

このバッグが語ってくれます。娘は私に感謝して贈ってくれた、私にとって忘れられない嬉しい事です。嬉しい私は、娘にも感謝します。「娘よ。今まで元気に育ってくれてありがとう。優しい心を備えてくれてありがとう。」と。

このカバンを見るたびに、自分自身の幸せの裏に、周囲の方の支えや優しさがある。人への感謝の気持ちをもつことを忘れないでしょう。

大工さんの道具

川畑小(南) 坂 元 なおみ

みなさんは、大工さんを知っていますか。大工さんとは、みなさんが住んでいるお家を建てる仕事をしています。今日はその大工さんがお仕事をする時の道具のお話をします。

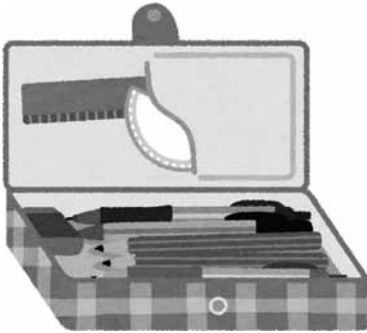
ある所に、AさんとBさんという大工さんがいました。Aの大工さんの所には「私の家をぜひ建ててもらえませんか。」と、毎日のようにお客さんが訪ねて来ます。人気のある大工さんです。しかし、Bの大工さんの所には誰も訪ねてきません。Bさんは、腕に自信がありましたから、悔しい気持ちでいっぱいでした。そこで、Bさんは、Aさんの仕事をこっそり見に行くことにしました。すると、Bさんはびっくり。Aさんが道具箱を開けると、そこには、ぴかぴか光る手入れがなされた、鋸やカンナ、ノミ等がきれいに揃えられ箱に入っていました。Aさんは、その道具を使い、それはそれは手早く、丁寧に、一本一本をきれいな材木に仕上げていきました。これが大工さんの道具箱(道具の写真)です。

Bさんは、家に帰り自分の道具箱を開けてみ

ました。そこには、さびている道具がばらばらに入っていました。良い仕事をするには、道具を丁寧に扱い、前の日によく削れるように磨き、明日の準備をしてこそ良い仕事ができることにBの木工さんは気付きました。

さて、みなさんの道具は何でしょうか。鉛筆、教科書、ノート、下敷き、体操服などもありますね。まずは、これらの道具が道具箱であるカバンに入っていないと次の日に学習ができませんね。つまり、Aの木工さんのように、前日の準備が大切だということです。そして、きれいな文字を書くために、鉛筆をといでおく、必要な本やノートの入れ忘れがないよう準備する。良い準備は良い仕事（良い勉強・学習）に繋がるといってお話でした。

四月、一年のスタートです。物には名前を書き、良い学習の習慣を身に付けましょう。



「気づき 考え 実行できる生徒に」

牧之原中(始) 岩 下 修 一

昨年、秋のノーベル週間に、ノーベル賞の話をしました。覚えていきますか。

アルフレッド・ノーベルが、どのようにして莫大な財産を築いたか。どのような思いで、遺言としてノーベル賞を設立したか。その上で、日本人として初めてノーベル賞（物理学賞）を受賞した湯川秀樹博士が、六十五年前の冬の日、本校を訪れ、「努力の積み重ねが大切」と、皆さんの先輩方に向けてエールを送られたという話をしましたね。今朝もノーベル賞に関する話をします。

ノーベルが望んだのは「世界平和」です。そのために、ノーベル賞には、平和賞が設けられています。その第一回ノーベル平和賞を受賞したのが、赤十字の創設者、アンリー・デュナンです。デュナンは、旅の途中、イタリア統一戦争に遭遇し、その悲惨な状況を『ソルフェリーノの思い出』としてまとめました。そして、「たとえ戦争であっても、傷ついた兵士はもはや兵士ではない」と、負傷兵を救うためのルールと、戦場で敵・味方の別なく救護活動を行う民間の

団体を各国で創ることを提案しました。それが現在、百九十二か国が加盟する赤十字へと発展したのでです。

赤十字が最も大切にしているのが「人道の精神」です。易しく言えば「困っている人を助けようとする心」です。ニュースなどで地震や台風などに被災された方々に、支援を行っている様子を見たことがある人もいると思います。

皆さんの周囲に困っている人はいませんか。学級の中に苦しい思いをしている友達はいませんか。そんな人たちに寄り添い、できることを考えて、行動にうつすことが、「助け合い」の学校や街づくりにつながります。青少年赤十字加盟校の生徒として、「人道の精神」を具体的に行動にうつす力を身に付けてほしいと思います。

デュナンの誕生月である五月は「赤十字月間」となっています。これを機に、デュナンが唱えた「人道の精神」について、自分たちの身の回りに置きかえて考えてみましょう。



読書案内



■藤尾秀昭 監修

1日1話、読めば心が熱くなる 365人の仕事の教科書

城南小(市) 高山 謙 一

本を開いて文字をなぞりながら読むという行為は、いつから自分の楽しみとなったのだろう。この一ページずつ本を開くのは、自分にとってまさに癒しのひとときであり、ストレス解消の時間でもある。そう言えば、最近書店へ出向く機会も少なくなってしまう気がする。

それでもタイトルに惹かれて本書を購入し、軽い気持ちで読み始めることにしたのだが、いつの間にか涙を流している自分に気が付いた。こんなことは、これまででもなかなかないことだ。

小学生だった頃、わくわくしながら図書室の本を手にしていった時と違い、大人になってからは涙もろくなってしまうのかも知れない。それほど本書には、多くの人生が描かれており、その一つ一つに心を熱くさせる力があつた。

これらの人生を辿り、その時々を精一杯生き抜いた方々の見方、考え方に圧倒されてしまう。ジャンルも多様である。経営者、労働者、教育関係者、学生、ボランティア関係の方々など、ありのままの体験が飾り気なく描かれている。その人々の熱意が文字を通して、私の心に火を灯してくれたのだと思う。

学校の日常風景も数多く描かれている。教師が日夜思い悩み、行動し、後悔しつつもなお、前進しようとする普段の姿が描かれているのだ。これらを一つずつひもときながらページをめくっていく。ある時は、立ち止まり何度も読み返す。ある時には、ノートに言葉を視写していく。ガッツ石松氏、井村雅代氏、稲盛和夫氏など多くの著名人の言葉は秀逸だ。その生き方、考え方に、目から鱗が落ちる思いをする。

全編に共通する人間としての生き方を教えてくれる一冊でもある。一日一話では、もつたいたいと思わせてくれる貴重な一冊としてお勧めしたい。

致知出版社 二、三六〇円＋税

■かこさとし 著

未来のだるまちゃんへ

栗野小(始) 猿 渡 司 郎

かこさとし(加古里子)は絵本「だるまちゃん」とてんぐちゃん」で有名な絵本作家である。子どもに読み聞かせをした「からのパンやさん」では、様々な種類のパンの描写が印象に残っている。「かわ」「海」「宇宙」などの科学絵本は、丁寧かつ繊細な説明・描写は百科事典に勝るとも劣らない。

本書は、著者の幼少期から戦中・戦後を経て絵本作家に至るまでをメッセージを込めて綴られている。全編を通して子どもへの尊敬と子どもへの無限の可能性への期待感が感じられる。

前半は、子どもの頃の体験談を交えて、里山から学んだことや子どもへの思いと大人の考えのすれ違いが書かれている。後半は、絵本作家への道程が書かれており、敗戦直後の大人への失望憤激。セツルメントの子どもたちとの出会い。子どもの絵描き歌がきっかけで伝承遊びの調査に没頭。調査は一九四〇年代から九〇年代まで続き、ライフワークとなり、創作活動の土台となった。著者の「メモ魔」も見逃せない。書く

ことは人をよく見る。よく観察して、その理由や裏面を分析しようとする。絵本の随所に見られる「物尽くし」や「見取り図」は、工学博士としての視点をもって子ども相手だからこそ、真理の追究にこだわった著者の執念が伝わってくる。

最終章で、筆者は次のように述べている。生きるということは本当は喜びです。生きていくというのは、本当はとても、うんと面白いこと、楽しいことです。もう何も信じられないと打ちひしがれていた時に、僕は、それを子どもたちから教わりました。遊びの中でいきいきと命を充足させ、それぞれのやり方で伸びていくとする。(中略) この世界に対して目を見開いて、それをきちんと理解して面白がってほしい。そうして、自分の生きていく場所がよりよいものになるように、うんと力をつけて、それをまた次の世代の子どもたちに、よりよいかたちで手渡してほしい。と。

文藝春秋 七二六円



■石崎 孟 著

「平尾誠二 人を奮い立たせるリーダーの力」

宇宿小(大) 岩 戸 修 二

今からおよそ五年前、平成二十八年十月に天国へ旅立った平尾誠二氏。言わずと知れた日本ラグビー界を代表するスターの早すぎる死は、ラグビーファンのみならず多くの日本国民を悲しみに巻き込んだ。

元日本代表の山口良治氏を監督とする無名の弱小チーム「伏見工業高校」の主将として初の全国優勝を飾る経緯は、ドラマ「スクール☆ウォーズ」のモデルとなったことは有名である。また、その後進学した「同志社大学」では大学選手権で三連覇を果たし、卒業後は社会人チーム「神戸製鋼」で日本選手権七連覇を達成するなど、常に常勝チームの中心として活躍した選手であった。新日鉄釜石の松尾雄治氏とともに、一九八〇年代のラグビー人気を牽引した名選手であり、華麗なプレーと数々の名勝負に魅了されたものである。

本書は、日本ラグビー界、スポーツ界の未来について平尾氏が遺してきた言葉の中から、組

織をまとめていく「リーダーの力」というキーワードをテーマに構成された書籍である。『完成度の高いチームは、関わる全ての人間が「チームは自分のもの」と答える』『人を動かせるのは人しかない』『叱るときは四つの心得「プレーは叱っても人格は責めない」「他人と比較しない」「長時間叱らない」「後で必ずフォローする』『おもしろいと思えなければ「主体性」は芽生えない』など、リーダーとして結果を残してきた平尾氏だからこそ語れるリーダー論の数々が紹介されており、管理職として、また、教育に携わるものとして大変参考になり、興味深く読み進められる本である。

現役引退後、日本代表監督も務め、その卓越した先見性で、現在の日本代表の基礎を構築した功績は大きい。前回のワールドカップ日本大会では平尾氏が目指した「世界と戦える日本のラグビー」が実を結びつつあることが証明された。今後も、桜のジャージ「ラグビー日本代表」の活躍が楽しみである。

マガジンハウス編 一二〇〇円＋税



旅上

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背廣をきて

きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくとき

みづいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月の朝のしののめ

うら若草のもえいづる心まかせに。

萩原朔太郎

一般(財)県校長会館だより

教育長異動

○新任 令和三年二月二十四日付

志布志市 福田裕生氏

(前大龍小学校長)

○新任 令和三年四月一日付

肝付町 上久保秀樹氏

(前文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
専門官併支援第一係長)

○新任 令和三年五月十七日付

出水市 大久保哲志氏

(前長田中学校長)

○再任 令和三年二月八日付

伊仙町 大山惣二郎氏

○再任 令和三年四月一日付

鹿屋市 中野健作氏

○再任 令和三年四月一日付

指宿市 吉元鈴代氏

○再任 令和三年五月十一日付

阿久根市 中野正弘氏

○再任 令和三年五月十四日付

始良市 小倉寛恒氏

○再任 令和三年六月一日付

錦江町 畑中清和氏

編集

後記



人事異動により職員が入れ替わり、新たな関係を築きながら、年度初めの行事、報告とあわただしく日々が過ぎていることと
思います。また、新型コロナウイルスも「変異」という新たな敵が現れ、今年度もさらなる行事等の見直しをせざるを得ない状況
になっていきます。

さて、校長として最終的な判断を迫られる場面が多くあり、時には思うような結果を得られず、悩んでおられる方もいると思います。以前読んだ本に「物事がうまくいかないときは、誰でも落ち込みます。ごく当たり前のことなのですが、その『落ち込み』を『落ち込んではいけない』と否定する人が少なくありません。そして、『落ち込まないためにはどうすればいいか』などと考えて、さらに悩みが増していくのです。そして、自分を責めれば責めるほど自信を無くして行動できなくなっていく。」ということが書いてありました。

私たちは同じ悩みを持つ校長会という仲間がいます。困ったときは周りに助けを求め、力で解決につながります。相互に協力し、自信をもって、「反省しても後悔せず、子どもたちの笑顔を思い描いて」学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

先生方からお送りいただいた体験や、これからの取組や意欲が湧いてきました。御多用な中、玉稿をお寄せいただきました執筆者の皆様、厚くお礼申し上げます。

大平公明(天保山中学校)